

## 逝去された名誉会員等への追悼文

### 小西正光先生を偲んで



昭和17年 6月12日生  
 昭和42年 3月 大阪大学医学部卒業  
 昭和47年 3月 大阪大学大学院医学研究科修了  
 昭和47年 4月 大阪府立成人病センター医員  
 昭和58年 5月 大阪府立成人病センター循環器検診第1科部長

平成元年 9月 国立循環器病センター集団検診部医長  
 平成2年 10月 国立循環器病センター集団検診部長  
 平成7年 7月 愛媛大学大学院医学系研究科教授  
 (公衆衛生・健康医学分野)  
 平成13年 3月 愛媛大学医学部長兼務 17年2月まで  
 平成20年 1月 大阪府立健康科学センター所長  
 平成21年 7月 逝去  
 平成3年 4月 厚生省公衆衛生審議会専門委員 7年まで  
 平成10年 1月 文部省学術審議会専門委員 12年まで  
 平成10年 7月 第13回日本心臓財団予防賞  
 平成19年 10月 第66回日本公衆衛生学会総会学会長

小西先生は、昭和42年に大阪大学医学部をご卒業後、循環器疾患の疫学研究のため、翌年、大阪大学医学部公衆衛生学教室の大学院に進まれると同時に当時、大阪府立成人病センターにおられた小町喜男先生（筑波大学名誉教授、大阪府立健康科学センター顧問）に師事され、研究グループの一員として高血圧、脳卒中の疫学的解明のため、大阪、秋田の地域で積極的な研究活動を開始されました。

研究では中年期以上の地域住民を対象に地域挙げての健診、指導を行うとともにデータ解析のみでなく、当時、我が国で多発していた脳出血の実態を客観的、学問的に把握するため、厚生連の中核病院の秋田県由利組合総合病院で20数年にわたり延2千数百例に及ぶ脳卒中の病理解剖を行われました。

この画期的な研究を進めるにあたり、当時の大阪大学医学部病理学教室の岡野教授の指導の下、病理の基本から勉強され、病理学教室の人よりも人間の病理が解る人との高い評価を受けられました。

病理学的な検討では、単に脳の断面をマクロ的にみて脳出血、脳梗塞を判断するのみではなく、脳の細小動脈の顕微鏡的な検討を行い、脳の穿通枝系動脈など小動脈、細小動脈の変化をも刻明に調べられ、その細部にわたる膨大な作業を20数年も継続し

て調べあげられたことに大きな意義があります。

この結果、我が国の脳卒中の実態は、従来、欧米で認められていた結果とは異なり、その発症要因には我が国独自の特徴があると言う小町先生の研究グループの学説に病理学的な証拠を明確に示し、その学説の正当性を証明されました。その研究結果は、我が国はもとより世界的にも高く評価されています。

これらの業績は、平成19年に松山市で開催された第66回日本公衆衛生学会総会の学会長講演として発表されたのみでなく、小西正光教授退任記念誌にも掲載され、さらに、日本医事新報に「日本人の循環器疾患の原点とその後の変遷—秋田における病理・疫学的研究を中心にして」と題して、平成21年4月以降、3回に分けて掲載されました。

小西先生は単に疫学調査研究を行うのみでなく、その成果を地域に還元することに力を注がれました。大阪府八尾市南高安地区では率先して地域住民の組織づくりを行い、従来の行政主導の活動を転換し、住民自らが組織を作り、健診の計画、実施、生活指導に至るまで積極的に関わる住民主体の活動へと高められました。その結果、南高安地区成人病予防会が結成され、現在も活発な活動が展開されています。平成元年に国立循環器病センターに移られてからも、吹田コホート研究対象者の組織化をはかられ、吹田循環器病予防会の会（さつき循友会）が結成されています。平成7年には愛媛大学医学部公衆衛生学教授に就任され、愛媛県内各地で脳卒中の実態把握の活動を行われた結果、脳卒中発症者の中には、現在でも過去にみられた我が国の脳卒中の特徴が残り、メタボリックシンドローム対策のみでは、すべてを把握できないという極めて重要な知見を示されました。また県内各地で住民組織の結成に取り組み、住民主体の活動を育まれました。大学では2期にわたり医学部長を勤めて大学改革を進められるとともに若き学生への教育に情熱を注がれました。平成20年からは大阪府立健康科学センター所長として、健康科学の発展のため、ご尽力いただいておりますが不幸にして不帰の客とされました。

小西先生は地域に根ざした公衆衛生の研究者、実践者、また飽くなき探求者として公衆衛生の発展に大きな貢献をされました。我々後進には住民主体の公衆衛生の重要性を真剣にご指導いただきました。その教えを心に深く刻み、遺志を引き継ぎ取り組んでいく覚悟です。先生のご業績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

大阪府立健康科学センター所長 石川善紀

## 故 野村 茂先生を偲んで



大正10年 8月 7日生  
 昭和21年 9月 満州医科大学卒業  
 昭和22年10月 労働科学研究所所  
 員  
 昭和29年 8月  
 信州大学医学部衛生学教  
 室講師（助教授を経て）  
 昭和34年 4月 名古屋大学医学部  
 衛生学教室助教授

昭和35年 9月 熊本大学医学部公衆衛生学教室教授  
 昭和62年 3月 同定年退職，熊本大学名誉教授  
 昭和62年 4月 労働科学研究所主管研究員  
 昭和62年 4月 昭和大学医学部客員教授  
 平成21年 7月26日 逝去

野村茂先生は、2009年（平成21年）7月26日永眠されました。約2年前に前立腺癌が発見され、肺に転移し、入退院を繰り返されていました。前夜式、御葬式は所属されていた日本キリスト教団藤沢教会にて行われました。享年87歳でした。

先生は、静岡県でお生まれになり、土肥慶蔵先生の弟子であられた父上が旧満鉄の衛生部長に就任されるのに伴い、満州医科大学で勉強され、終戦による混乱のなか、1946年（昭和21年）に卒業し、日本で最初の医師国家試験に合格され、医師とされました。

先生は戦後の混迷の中で労働科学研究所に入所し、職業病研究室にて、久保田重孝先生に師事されました。研究所は当時わが国の労働衛生学の中心的な位置を占めていたので、復興期の劣悪な職場環境のなかで、数多くの産業中毒の調査・研究に当られました。特に職業性皮膚障害について研究を深め、若くして名著「日本の職業性皮膚障害」を刊行し、この領域の先駆者としてわが国の産業中毒学の歴史に名を刻むことになりました。

その後、教育、研究の場を大学に移し、信州大学、名古屋大学で少壮の研究者として着実な歩みを進められました。

1960年、喜田村正次先生の後任として、熊本大学

医学部公衆衛生学教室に赴任され、27年間の在任期間にわたり日本公衆衛生学会、日本産業衛生学会を中心に関連学会で、中心メンバーの1人として活躍されました。職業性皮膚障害を体系化し、皮膚毒理学の構想に発展させ、特に熊本の地場産業である農業における農業中毒や、農村婦人の貧血の問題に取り組まれました。他方、当地域の懸案である水俣病にも、社会的に非常に困難な状況のなか、社会医学の立場から慎重かつ果敢にアプローチされました。

野村先生の学風を要約することは僭越に過ぎますが、職場や地域社会における公衆衛生上の諸問題を端緒に、国際的に通用するような知見を積み、学問的成果をあげるとともに、研究成果が現場や行政にも反映するように積極的に努力するという点で首尾一貫していたように思います。また、先生は医学生は勿論、保健師の教育に大変熱心で、熊本に県立保健学院が創立する際、重要な役割を果たされ、また、大学の公衆衛生学教室のなかに現役保健師の研修の場をおつくりになり、後に中核となる人材がこれに積極的に参加しました。

先生は学問の追及には妥協を許さない大変厳しい方でしたが、併せてキリスト教の信仰に基づく堅固なヒューマニズムをお持ちでした。大学紛争時、大学、学生双方の信頼を得て、紛争解決時の1970年熊本大学改革委員会委員長になられた時の姿勢に、その一端が伺えました。

先生は内剛外柔の、実に温厚な方でした。いわゆる「一将功成つて万骨枯る」というタイプではなく、若い研究者の自主性を重んじ、こまめに人材育成に心を砕かれ、大勢の門下生が公衆衛生学を一生の仕事と決めました。

先生は、去る3月15日に強い希望で御来熊になり、先生が壮年期を活動的に送られた、熊本の各方面で活躍している門下生に最後のお別れをなさいました。私どもの心配をよそに、しっかりと立って、大きなお声で感動的な挨拶をなさったお姿を忘れることはできません。

先生、どうか安らかに天上にておやすみください。

感謝と尊敬の念を込めて。

九州看護福祉大学学長 二塚 信

## 渡辺正男先生を偲んで



大正9年6月9日生  
 昭和26年3月 北海道大学医学部  
 卒業  
 昭和27年3月 同大学医学部付属  
 病院にてインターン終了  
 昭和27年8月 大阪大学微生物病  
 研究所細菌化学部研究生  
 昭和31年9月 大阪大学医学部第  
 三内科研究生

昭和32年11月 福島県立医科大学助教授（衛生学）  
 昭和40年11月 大阪府立公衆衛生研究所主幹  
 昭和45年4月 同，微生物課長  
 昭和49年7月 富山県衛生研究所所長  
 昭和55年4月 富山医科薬科大学医学部保健医学教室教  
 授  
 昭和61年4月 富山女子短期大学教授  
 昭和62年4月 糸魚川医療生活協同組合立姫川病院院長  
 平成元年4月 医療法人社団友愛病院会・黒部温泉病院  
 院長  
 平成4年7月 医療法人財団恵仁会，老人保健施設ケ  
 アーホーム陽風の里施設長  
 平成21年1月8日 逝去

富山医科薬科大学（現富山大学）医学部で、我が国最初の保健医学と命名された教室を昭和55年に立ち上げられ、富山での第44回日本公衆衛生学会長を務められた渡辺正男先生は、平成21年1月8日に88歳の生涯を閉じられました。

先生は、大正9年6月9日に北海道江別市でお生まれになり、昭和12年3月に北海道庁立札幌第一中学校を優秀な成績で修了された後、北海道帝国大学予科を経て昭和15年4月に同大学医学に入学されました。しかしながら入学されたその年の9月に結核のため休学やむなきとなりました。特効薬や標準的の外科療法がまだ無かった時期でしたが、果敢にも外科的治療の先駆けである気胸手術に運命をゆだねられました。生還して北大医学部に復学されたのは昭和22年4月でした。先生は第二次世界大戦のあいだ当時の死の病気であった結核との闘いを6年余りにわたって貫徹されました。沈着泰然として世俗的なものとは一線を画された人格形成にはこの時期のご体験が大きく影響したと思われます。

北大ご卒業後はご自身が苦しまれた結核などの感染症の研究の最先端にあった大阪大学微生物病研究所の細菌化学部の研究生から医師そして研究者としてのスタートをきられました。大阪での感染症の研究や臨床の研鑽の後は請われて、福島県立医科大衛

生学教室の助教授として、同県の保健所所長も兼務されながら衛生行政と連携した教育研究に多忙な日々を送られたと伺っております。

しかしながら元来探究心の旺盛な学究肌であった先生は、手がけた感染症の研究を極めんと米国留学の道を自ら選択され、ウエスタン・リザーブ大学医学部微生物学教室に2年間留学され、帰国後はまた大阪で研究生活に戻られました。

大阪府立公衆衛生研究所で10年近く勤務された後、再度請われて富山県衛生研究所所長に就任されました。当時の富山県ではイタイイタイ病の公害認定を受けて、患者救済や被害拡大防止に関する施策が精力的に展開されており、衛生研究所もその先頭に立ってさまざまな調査研究に奔走していました。先生は所長としてこれらの課題に誠実に取り組みながらも、留学時代に研鑽されたウイルス学を基盤にした基礎ならびに臨床的研究にも従事されました。富山に来られてまもなく、先生は新しく創設されることになった富山医科薬科大学の教授候補者の内定を受けられました。この時、同教室の助教授に内定されたのが私で、爾来、親しくご指導を受けることになりました。この保健医学教室は、市民の健康を護るコミュニティづくりを研究の目的として創設されたので、先生は教室の英語名を「Department of Community Medicine」とされました。教室がスタートしてからは、先生は、引き続きイ病にかかわる行政の仕事に関与されつつ、新たに研究課題を立ち上げられました。先生お得意のウイルス学を基盤にした衛生的研究を実験ならびに疫学的手法により展開するものでした。また、来たるべき癌の時代のために富山県癌登録システムの立ち上げに奔走され、私たちもこの仕事を通じて公衆衛生施策における大学の役割を実地に学ぶことが出来ました。また、先生は人材育成にも大変力を注がれました。大阪と富山の研究所そして富山大学を通じて先生の静かな情熱あふれる指導のおかげで教育者、研究者そして行政面で多くの人材が育ちました。私の教授就任についても大変果敢で正攻法の行動をとっていただいていたことを事後に他の人から聞きました。

公衆衛生の先達でもある後藤新平は、「財をなすことは下、仕事で成功することは中、人を育てることは上」と断じています。奇しくも私が定年を迎え、先生の孫弟子が公衆衛生の教授に選出された年に先生は逝かれました。

多くの後進を護り育ててくださった人徳あふれる先生を偲び深く感謝申し上げます。

合掌

富山産業保健推進センター所長 鏡森定信